

# 弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

看護学部・看護学科  
中尾 八重子

作成日 2024年1月31日

## 1. 教育の責務

2023年4月、本学看護学部の公衆衛生看護学領域の教授として採用され、1年目である。公衆衛生看護学領域は、いわゆる保健師教育課程の担当で、本学では保健師教育課程は選択制となっているが、保健師国家試験受験資格取得のための科目の約半数は全学生必修となっている。そのため、全看護学生には、公衆衛生看護学の概念・理念等や基本的な技術を、保健師教育課程選択学生には、さらに公衆衛生看護の具体的な活動や実習等で実践力の習得が出来るよう指導教授している。

### 2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
健康づくり実習 I	1年	実習	前期	人々の生活と生活を支える社会資源
地域包括ケアシステム論	1年	講義	後期	地域包括システムの意義と高齢者・母子・精神疾患を抱える人への支援システム
公衆衛生看護学概論	2年	講義	前期	公衆衛生看護の概念・理念と目的
研究方法論	2年	講義	前期	研究とは 質的研究
公衆衛生看護方法論	2年	講義	後期	公衆衛生看護の技術：保健指導・家庭訪問・健康相談・地域組織活動
健康教育論	2年	講義	後期	健康教育の意義と展開方法、健康教育の実際（企画書・指導案・媒体）
ヘルスプロモーション論	3年	講義	前期	ヘルスプロモーションの考え方とそれに基づく健康づくり対策
公衆衛生看護管理論	3年	講義	前期	公衆衛生看護管理の目的と特徴、具体的な機能とその活動
公衆衛生看護学実習	4年	実習	前期	個人・家族、集団のニーズへの対応と健康保持増進に向けた支援
健康危機管理論	4年	講義	後期	災害サイクルと看護、感染症対策

## 2. 教育の理念

看護は科学であり、その目的は「その人がその人らしく健康的な生活を営めること」であるため、看護職には、科学的根拠、論理的思考、様々な人々（対象）の理解・健康の捉え方・生活の意味・社会への関心等が求められる。また、保健師の多くは、行政職になるため国の動向（施策）や社会情勢等にも敏感でなければならない。これらのことから教育の理念の1つは『学生が自身の生活体験を大事にし、対象となる人々の豊かな生活を目指した看護（活動）ができる教育』で、2つ目は『科学的根拠に基づき論理的思考過程による看護（活動）ができる教育』である。

専門職は、事象をその専門の観点から分析し、判断しなければならないため、「考える力」が重要となり、考えるためには、事象に対する自身の気持ちの動きが不可欠と考える。本学の多くの学生は、授業や実習等で新たに知ったことや体験を「学び」と捉え、そこで留まっている傾向にある。新たに知ったことや新たな体験に対する自身の思考・感情の整理、客観的な解釈によって自身の新たな一面に気づいたり、物事の捉え方が変わり、それが学びとなる。つまり、リフレクション（内省）が重要で、看護の対象は様々な人であるため、ある意味看護は正解のない仕事ともいえる。そのため、教育の理念の3つ目は『リフレクションの習慣を付け、適切なケア（活動）を模索できる教育』である。

## 3. 教育の方法

教育の理念のキーワードは「科学的根拠」「論理的思考」「考える力（リフレクション）」である。専門領域が公衆衛生看護学（保健師教育）で、多くの学生が保健師活動をイメージできないことと、看護職は実践者であるため実践が重要と考えていることから以下のような方法を用いている。

①演繹的講義法：多くの看護学生が保健師の活動をこれまで見たことがないため、イメージしにくい傾向にある。そこで、まずは原理原則を教授し、その後、具体的に事例を原理原則に応用し学習の理解につなげている。

②課題学習：学生自身の生活や具体的な事例から学習テーマを選定し、個人あるいはグループで取り組み発表する。関心のあるテーマでなければ調べる作業で終わってしまうため自身のこととして捉えられるよう、テーマの選定に留意している。

③グループワーク：個人学習では、学生によって限界があるため、グループダイナミクスを活用し、相互に学習を深めながら課題を完成させる。また、看護はチームで協力して行われるためグループワークによって人間関係能力の向上を狙う。但し、個々の学生の理解度が把握しにくいいため、繰り返しグループ面談を行い、個々の学生の学習状況を観察している。

④ロールプレイ：公衆衛生看護の技術において、活動の原理原則を教授するだけでは、物事の問題点に気づきにくいいため、自らが患者や家族を設定し、適切な対応を考える。但し、看護や公衆衛生看護、疾病等、基本的なことの理解が不十分な段階（学年）では、ロールプレイによる効果が低いため、この方法の取り入れ方を工夫する必要がある。

## 4. 教育の成果

本学での教員1年目であるため、今年度の学生達の反応から良かったことを推察した。

### ①グループワークと繰り返しの面談（健康教育の実施）

- ・健康教育の企画書と指導案、媒体の作成から発表まで約1.5ヶ月間での取り組みである。その間、健康教育技術の理解と「わかることの楽しさ」を目的に、グループごとに繰り返し面談を行った。取り組み当初は、講義での教授内容はほとんど活用されず、中には教授内容を覚えていない学生もいた。また、面談での教員の問いの意味を理解できない学生も少なくなかった。しかし、面談を繰り返すうちに、行っていることを座学の教授内容にあてはめたり、教員の問いについて考える学生が総じて多くなり、また、理解できたことに喜びを表現していた。
- ・（健康教育の終了レポートから）多くの学生が「自分たちでやり遂げた」ことに満足感を持っていた。

### ②他学生からのフィードバック（健康教育の実施）

- ・「他グループの健康教育への意見」の記載を課し、各グループにフィードバックした。自身も同じような過程をたどり取り組んできたせいも具体的な建設的な意見を書いている学生が多かった。
- ・他学生の意見も踏まえ、自身（グループ）の健康教育を振り返り、今後の健康教育（次年度の実習）について言及しているレポートが多かった。

## 5. 教育の改善

今年度の学生達の反応から改善が必要な点は以下と考える。

### ①授業内容の確認（要点のおさえ）

- ・総じて担当科目の本試験は、約3割の学生が合格点に至らなかった。これは、その科目での重要度が選別できないあるいは重要なことの理解が不十分、重要な事は理解できているが覚えられなかった等が考えられる。重要度の選別は、科目の到達目標が認識されていないともいえる。講義初回に、本科目の位置づけや到達目標を説明しているが、説明の意図や内容の意味を丁寧に伝える必要がある。また、重要なことの理解については、授業で、質問をし、繰り返しやさらに具体的な説明をしてきたが、まだ不十分と思われる。そのため、毎回の授業の開始時には、前回の授業内容を、授業終了時には本時内容のおさえを確実にする。

### ②基本的なことの指導や助言

- ・レポートや実習記録の書き方、レポートのテーマの設定、質問への対応など基本的なことに関し、不適切な学生が多い。これらのことは、1年次の「基礎演習」で学習していることであり、文章力や対応については、高校までの教育とも関連している。しかし、その基本的なことのできていない学生が一定数いるので、「その時に」「具体的に」助言・指導していく。また、基本的なことは、繰り返し実践しなければ身につかないため、学部（教員）全体（全員）で取り組むことも必要であろう。

## 6. 教育の目標

学生に「考えられる看護職」「バランスのとれた社会人」になってほしいと考えている。前者については、これまでの述べているとおりである。後者の「バランスのとれた」とは、経営者として有名な稲盛和夫の『何事に対しても常に「なぜ」という疑問をもち、これを論理的に徹底して追求し、解明していく合理的な姿勢と、誰からも親しまれる円満な人間性をあわせもった人』と同じような意味である。人を対象とする看護職は、論理的な思考と合理性をもつとともに他者との関係を築いていけることが重要となる。論理的思考や合理性は、「考えられる」と一致しており、他者との関係の構築については、教員が学生ひとり一人と真摯に向き合うことで、学生自身が感じ・考え、自分なりに修得していくことだと考える。

### 【資料】

1. シラバス
2. 定期試験結果
3. 課題レポート、提出物